

家政系学科における秘書教育に関する研究(その正)  
 聖知大短大 林 雄太郎

目的 家政系学科における秘書教育の接点は、以前二つあることを示したが、その後の秘書学の発展により今一つ接点を考えることが必要となった。かつ、この接点により家政系学科の中で秘書教育を行なうことが要質ではなく、お互いに進化すると云う仮説を論ずることは秘書教育が隆盛している原因の一つを究明する事になり現代的課題と云えよう。

方法 家政学と秘書学および組織論の文献研究

結果 家政学においては「体」と「心」を二元的にとり元科学的に考察する西洋的科学の手法が少なく、それなりに多くの成果をあげてきた。その結果、例えれば、理論と行動現象の遊離となり、学問的貢献はあるが実践的貢献が少なく台子畑向(台子畑)に到った。さらに、二元論的思考から、家庭や職場内の種々の対立や紛争、個人主義が横行し、一つの行きがまりを感じるようになった。一方、東洋的思考は、「体」と「心」を一元的に考察すると共に、過去・現在・未来の三世の生命観を考察するとき、「和」の精神と組織の団結の強化がみられ、一元論で秘書教育を行なうことは、人間をそのまゝの姿で直視することになり、家政系教育で考える人間像に近似してくる。ところでアブラハム・マズローの欲求の段階に、重要な点欠缺しているのではなからうか。人間にはマズローの欲求の上に、自己革新(改革)と宗教的生活に生きる欲求が考へられる。情報時代の今日では秘書の業務は以前と大きく異なっており、人間存在の意味が、マン・マシン・システムの中で重要視されるようになった。又、ソニク・テクニカル・システムの中の家庭にあつても同様のことが論証された。ここに家政学の対象的思想の中に秘書学と云う社会科学が共存することが明確に存するのである。